
軽いっ！

よしき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

軽いつ！

【Nコード】

N9170B

【作者名】

よしき

【あらすじ】

ダイエットに成功した琴美は恋人の元へ自慢しに行く。でも本当の軽くなった理由とは…。

「うそ?!」

きっかけはほんの些細な事だった。

琴美の日課であるお風呂後の体重チェックの時。

昨日までは54キロはあったはずの体重が、51キロにまで落ちていたのだ。

今までどんなダイエットも効果なかったのに、何もしていないのに体重が減っている。

女性なら誰もが夢見る話しだ。

今まで数々のダイエット法を試してきた。

林檎ダイエット。グレープフルーツダイエット。ダイエット食品。そんな食料系から初めて、水泳、ランニング、エクササイズ等のスポーツ系。

足つばや体質改善教室にまで通った。

それら全てが何の効果も表さなかったのに、何故何もしないでやせたのか？

普通なら考え込んでしまう事も、ただの事実として単純に喜べるのが琴美の前向きで良いところかもしれない。

何度も体重計に乗り、数字を確認する。

やっぱり51キロだ。軽い

「やった!すごい、すごい!えらい、わたし!」

興奮しながら自分の部屋に戻る。

服ぐらい着なさいと母親に言われても、そんな事お構いなしだ。

「もしもし!あきら!聞いてよ!体重減ったの!すごくない?」

携帯から恋人のあきらに電話を入れる。

電話の向こうであきらがとぼけたような声を出す。

「へー。それで？」

「それでって…少しは喜ばないよ！」

付き合いが長いせいとか細かいことには無頓着になってきている。

これが世に言う「倦怠期」ってやつかしら、そう思いながらも琴美はため息をつく。

「別に体重が減ろうが増えようが、どっちでもいいよ。俺、まだ仕事終わんなくて事務所にいるんだよ。目の前の書類の方が問題だよ。」

「あつそ。大変ね。それで？」

琴美はさっきの台詞をそのままお返ししてやる。

「…で、何が言いたいんだ、お前？」

「嬉しかったから聞いて欲しかったの！」

「怒るなよ。また後で聞いてやるからな。じゃあな。」

一方的に電話を切られてしまう。

琴美は電話を投げ出す。

「あーっ、もうっ！あきらのバカッ！痩せて奇麗になったら浮気してやる！」

言っても余計虚しさが募ってくる。

一息ついて思い直す。

「よし、明日痩せた私を見てびっくりさせてやる！」

そしてクローゼットを開け、明日の服についてあれこれ悩み始めた。

「どう？痩せたでしょ？今朝も体重計ったけどさらに1キロ痩せてたんだから。」

あきらの部屋に上がりこんだ琴美はモデルのようにポーズをとる。

あきらは何度も琴美を見回す。

「じゃあ合計4キロ減ったんだ。」

「そ。で、どう？どう？」

あきらは渋い顔をする。

琴美は期待に満ちた顔であきらの言葉を待つが、一向に何も言わない。

「あきら！何とか言つてよ！」

痺れを切らして問い詰めるが、あきらは首を横に振る。

「わarii。わかんねえーよ。」

琴美は大きなため息をつく。

（これだから、男つてやつは…）

がつくりきいているところに、あきらの一言。

「もういいじゃん。それより腹減つてんだ。何か作れよ。」

琴美の中で何かがぶちつと音を立てて切れた。

「だめ！納得いかない。お風呂入るよ。」

「何言つてんだよ。先にメシ食わせてくれよ。」

「却下！お風呂場でちゃんと確認するまでおあずけ！」

「お前、ラブホじゃないんだから、狭くてやだよ。」

「いいから、早くして！」

「はっ？」

「お湯沸かしてきて！」

琴美は問答無用だ。

あきらは諦めて風呂に湯を張りに行こうとする。

琴美は風呂場に向かうあきらを呼び止める。

「あきら。隅々まで調べさせてあげるね。」

琴美の恥ずかしそうな笑顔。

「はい、はい。」

ぶっきらばうに答えながらもあきらは嬉しそうな顔をした。

すごく険悪なムードで食事が終わった。

理解のない彼氏の心無い一言に傷ついた琴美。

おあずけを食らって不満なあきら。

裸になった琴美に素直に言ってしまったのだ。

「変わってねえじゃん。」

嘘でもいいから褒めれば良かったのだが、つい言ってしまったのだ。こんな素直な所があきらの良い所だと思っていたはずの琴美も今回ばかりはそれを許せなかった。

「そんなはずない！」

言い張る琴美に、はいはいと適当な返事をしたのが悪かった。

「私、先に入るね！」

琴美は中に入ってぴしゃりとドアを閉めてしまった。

「一緒に入ろうって、お前が言い出したんじゃない。」

「狭いからヤダ！」

締め出されたあきらはパンツ一丁でとぼとぼと部屋に戻った。

その後風呂に入ろうとすると、ごはん作りを命じられる。

切れた琴美には何を言っても無駄。

それを長年の付き合いで理解していたあきらは渋々料理をしたのだ。食べ終わっても琴美の機嫌は治らない。

「片付けよろしくね。」

「はい、はい。」

「返事は一回でいいの！」

あきらが洗い始めるとすぐに見てられないとばかりに琴美が横に来てあれこれ指示を出し始める。

「これ、まだ汚い。ここんと。」

「はい。」

「もう、中もちゃんと洗ってよ。」

（じゃあ自分で洗えよ。）

とてもあきらにはそんな事言えなかったので思っただけにする。

「あっ！」

大きな皿があきらの手から滑り落ちた。

琴美は反射的に手を差し出す。

受け止めようと一歩前に踏み出した時だった。

ガシャーン！

皿の割れる音が響く中、琴美の体が天井まですっ飛んだ。

「いったーい！」

琴美は天井に頭をぶつけた後、床にふわりと着地した。

「大丈夫か…？ っていうかどこに頭ぶつけてんだよ！」

琴美は頭を押さえて悶絶している。

あきらは琴美に駆け寄り、頭を押さえてやる。

「いたっ！ 触んないで。…私どこに頭ぶつけた？」

混乱している琴美は現状が把握できないでいる。

「どこって天井だよ。キッチンの。」

「バカ言わないでよ。出来るわけないでしょ。」

「マジだって。」

「もういいよ。それよりベットに運んで。痛みが引くまで寝てるから。」

（もういいって、良くねえだろ。天井だぞ！ ぶつかったの！）

やはりそれも言えないまま琴美を抱え上げる。

「うわっ！ かるっ！」

ひょいと抱えあげたあきらが叫ぶ。

「えっ？ 何？」

「お前すごく軽くなってる…。」

「何よ、今更。」

「いや違う、前の半分ぐらいの重さしかないぞ。」

「はっ？」

「マジだって。」

真剣に言うあきらに疑いの眼差しをむける琴美。

「信じるよ。」

「じゃあ、体重計買ってきて。」

「なに？」

「この家、体重計ないから買ってきてよ。」

「店、開いてないだろ。」

すでに9時を回っている。

「ディスカウンドンドンなら夜中の2時までやってる。」

「ドンドンかよ…。」

そこまでは自転車で40分はかかる距離だ。でも、あきらに選択肢はなさそうだ。

「じゃあ、行ってくる…。」

琴美は満足そうに頷いた。

「20キロ!?」

2人同時に叫んでいた。

買ったばかりの2980円の体重計。

壊れているのだろうか?

試しにあきらが乗ってみる。

針はくるくる回って62キロを指した。

もう一度琴美が乗ってみる。

やはり20キロで止まる。

「何で?」

「何でって俺が聞きたいよ。」

手当たりしだいにその辺の物を乗せてみるが、大体納得いく数字になる。

しかし琴美が乗った時だけ20キロでぴたりと止まってしまうのだ。

「見た目が変わらないのに、体重だけ減っても嬉しくない…」

「嬉しいとかって問題じゃないだろ。明らかにおかしいぞ!」

「そんなの知らないよ。ねえ、あきら。何か気持ち悪いよ…。」

「わかった。明日病院行こう。俺もついて行ってやるから。な。」

「うん…。」

納得しきれない琴美が視線を落とす。

「やだ!これ、気持ち悪い!」

あきらが視線を落とすと、針が動いていた。

体重計の針がゼロに向かってゆっくり動いていた。

琴美は体重計を降りてそれを蹴飛ばす。

「あきら…こわい…」

琴美は泣きながらあきらにしがみつく。

得体の知れない不安が琴美の中に広がっていく。

家に帰らないことを電話した後、同時に布団に入った。

琴実の表情は不安を隠せないでいる。

「どうしよう、どうしよう、ねえ、あきら、私どうなっちゃうの？」
腕枕をしながら琴実の髪を撫でる。

告白した時以来久しぶりに見た不安そうな顔。

いつも自己主張が激しく、気ままな性格の彼女とは大きな違いだ。

（こういうのなんかかわいいなあ）

そう思いながら、当てもなく大丈夫を繰り返す。

すでに琴美は泣きそうな顔になっている。

「このまま体重が減っていったら消えちゃったりしないよね。」

「んなわけあるかよ。」

お互い確信がないまま不安だけが先走る。

「そうじゃなくても外なんか歩けないし…。風吹いたら飛ばされな
いかな？」

「俺が抱えて歩こうか？」

「あきらがいない時はどうすんのよ。」

「まー、家にいればいいんじゃないか。」

「だから、そうしたらどうやってあきらのどこに行けばいいのよ！」

「だから、ここにいればいいじゃん。」

何気なく言っただつもりだった。

「それって…プロポーズ？」

「はあ？」

「いきなり言わないでよ！嬉しいじゃない！」

「ちよつ、ちよつと待てよ。」

「うん、そうだね。それよりも子供が生まれたら体重、大丈夫かな？お母さんに似て体重はゼログラムですよ、なんて言われたらどうしよう。」

「そんな心配してる場合じゃないだろ！」

「大丈夫、ちゃんと家事育児はこなすから。結構自信あるんだから。まかせてよ！」

「じゃなくて、何で結婚って話しに…。」

「いいの、いいの、式は身内だけで済ませるから。あきらの給料具合くらいちゃんと把握してるから。賢い奥さんを貰って羨ましい、なんて言われたりしてね。」

「話し聞けよ！」

「じゃあ、あきらはどんな結婚式が良い？少しは意見言つてよ。」

（ダメだ。今の琴美には日本語すら通じない気がする…。）

あきらが頭を抱えているうちに、話しは勝手に決まっていくみたいだった。

4件目の医者から某大学の研究所を教えられる。

しかも物理学部。

案内された先で医者とも研究員ともつかない男に診断を受ける。

「反重力症候群ですね。」

「何ですか、それ？」

2人同時に聞き返す。

説明が難しかったのでおおまかに言うと、原因は不明だが体内に特異点を生み出してしまった人がそこに反重力物質を生成してしまうことがあるらしい。

それも何故か女性の体の中にしか出来ないと言う。

私は女性の願望が具現化されたものだと思ってますが、と付け加える。

よく分からないが、琴実の体の中に重力に反発する物質がある、とのことだ。

「で、治るんですか。」

問題はそこだった。

しかし男はあっさり言い放った。

「ああ、5分くらいで治療は終わりますよ。」

琴実を機械の間に連れて行き、きっかり五分で帰ってくる。

「何か、体が、重い…。」

「筋肉が弱ったんでそう感じるんですよ。少しずつ鍛えてくださいね。」

まさに重力に潰されそうな琴美に肩を貸し部屋を出て行く。

そうして全ては丸く収まったのだ。

「で、いつが良い？」

自転車の後ろであきらに話し掛ける。

「ん、何が？」

あきらは必死に漕いでいる。

何せ来る時は重さがなかったものが、50キロ近くにまで戻っているからだ。

「だから、昨日話したじゃん。私達の結婚。」

あきらはずっとける。

「またその話か。大体、体重が戻ったんだからもう問題はないだろ。」

「何それ、体重が重い女とは結婚できないって事？」

「そうじゃなくて、問題がなくなっただから、その話しも終わじゃないのか？」

「ひどい！結婚しようって言ったのに！私を騙したのね！」

「泣くな！わめくな！」

「式場で一人、花婿をいつまでもまつ私。可愛いそうだわ！」

「まだ、式場、予約してないだろ！」

「じゃあ、今から行こうか？」

「アホか！」

「アホって言った！。やっぱり私捨てられるのね！」

「捨てねえよ！いつか一緒に行つてやるよ。その、…式場に。」

「約束だよ。」

「はい、はい。」

「返事は一回！」

2人はそんなふうに、またいつもの日常に丸く収まりました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9170b/>

軽いつ！

2010年10月28日06時45分発行